

PIL 事続け

——PIL を通して “意味” を聴くという営み¹

千葉征慶

1. はじめに

本稿では、「PIL 事続け」と題した講演内容をもとに、PIL (Purpose in Life Test) を通して “意味” を聴くという営みについて整理します。PIL は、ヴィクトール・E・フランクルのロゴセラピー理論に基づき、人が人生にどの程度「意味」や「目的」を感じているかを測定する心理テストです。しかし、PIL は単なる測定道具ではなく、記入し、語り、聴くというプロセスそのものが、意味をめぐる対話の場となり得ます。

日本における PIL の導入は、佐藤文子先生による「日本 PIL 事始め」(「日本ロゴセラピスト協会論集第 9 号」99-117p) に詳しく記されています。佐藤先生は 1965 年に PIL を紹介され、渡米して開発者と直接交流し、日本版 PIL の研究と開発を進められました。1993 年には日本版が完成し、来日したフランクル本人に手渡すことができたとのことでした。

さて、私自身の PIL との出会いは、大学院時代に「人はどうしてやる気になるのか」という問いを探究したいと考えたことがきっかけでした。恩師から「それはフランクルの言う“意味への意志”ではないか」と助言を受け、紹介された文献の中に PIL がありました。その後、佐藤先生との出会いを経て修士論文で PIL を使用し、調査研究を行いました。2000 年には学会での発表を通じて勝田茅生先生と出会い、ロゴセラピーゼミナールで学びながら、現場で PIL を活用するようになり